子どもにおけるテレビ性知見

――子どもはテレビにどのように影響されているか――

室谷幸吉

こんにち、テレビが子どもの日々の生活の座に占める重さは、ずいぶんと大きく、その重さは、精神的にも時間的にも日に月に増大する傾向にある。

問題は、それが学習や、まともにスジの通った教育として入ってこないで、遊びの変形または手軽な楽しみとして、しかもそれが健全な姿に整えられてではなく、時に刺激的に、破壊的に、きわめて浮わついた形で進入してきている点にある。

ところで本稿では、そういう問題点を堀りおこすことによって解決の方途を考えるのが目的ではない。ここで私は、現象的にみて、テレビが子どもにとって、「新規な知識の門」となりつつあり、子どもの吸収する知識の質が、個人的にも集団的にも、偏りを見せ変移しつつあるという事実を実例に立って指摘したいのである。

☆

三、四年前、マンガが目のカタキにされたことがある。子どものマンガ熱が目にあまるほど高くマンガからうけるよくない影響が無視できないということだった。その悪い影響のひとつは、子どもの日常語の乱れとなって現れた。

オイコラ・テメエ・コンチキショウ・コノヤロウ・ヒェッ・ギャアッ・ゲッ・ヤバイソ・オス・ヤロウ・ヒッバタクゾ・シケテヤル。

小さなチンピラ、幼いヤクザを連想させるコトバの受けこたえは、心ある親たちのマユをしかめさせずにはおかなかった。

これは、子どもの言語生活面において、マンガが権威をふるっていたからだとみることができる。そして子どもらの日常生活にとりこまれたことば、つまりマンガ性言語は、そのコトバに随伴してマンガ性知識を子どもらの心や行動面に反射投影する。二階の屋根に上ってすべりおちたり、パチンコでおかあさんのおシリをねらいうちしたり、青カエルをつめた小箱を、友だちの誕生日にプレゼントしたりといったマンガ味の多い行動の悲喜劇を、あちこちで聞かされもした。

そして今日、マンガに対する子どもらの興味や関心は依然として強いが、四五年前の「マンガ・マンガ」で、マンガ問題一色にぬりつぶされていた頃と、近頃とくらべてちがったのは、新しい

マス・メディアとしてテレビが登場してきたことだ。

テレビへの興味指向は、あるいはマンガ熱以上に強いものかもしれない。テレビ聴視の領域は、現在、拡大一途の途上にある。

今日以後、引きつづき増大する家庭へのテレビ受像器の浸透は、ますます子どもらの目と心を広範にテレビの世界にひきずりこみ、善悪両面の深く強い影響で、子どもの世界（言語・知識・行動・思考）を左右するにちがいない。近くおこなわれる〝教育テレビ〟の放送開始と見合って、このことは一層痛感させられる。

テレビは時にすぐれた〝教育者〟であり、時には、始末におえない無茶な〝誘惑者〟でもある。テレビの両刃性は、新聞雑誌やラジオの比ではない。

問題をマンガひとつに限ってみても、テレビが、紙にのせられた印刷マンガへの興味指向や関心傾斜を食いつぶしてしまうことがあるかもしれない。テレビにのせられるマンガは、とにかく「生きたように動く」のである。この動くという魅力は絶対の強味である。

☆

子どもにとって、最も権威のある知識の門は、むかしも今も、学校（幼稚園もふくめて）であろう。

「学校の先生がそういったんだ」または「先生は言わなかったよ」と、親の考えに、いともやすやすと反撃を加えたり、先生の言ったことをタテにとって、子どもが自分の発言の正当性を承認させようとする場面に、たいていの親は幾度となくぶつかっている。そして、りこうな親たちは、こと面倒となると「学校にいってナ、よく先生にきいてみな」と学校の先生にカタよせて万事を解決するスリカエ手法を使う。こういう考えは明らかに誤りである。しかし、先生の言うこと、または教科書に書かれたことが、すべて正しいことであるかどうかは別問題として、教師性言語が子どもの知識吸収・生活啓発の基本的な権威であると子どもたちに考えられていることは、こと新しいことではないが注意されねばならない。

また、新聞も子どもたちにとって、先生と同等視されるほど権威の高い知識の媒体である。新聞を権威視するところから生ずる〝新聞性言語〟の横行、吸収知識のうらづけ保証に、「新聞」をひき出すという日常手法は、おろそかに扱われてはいけない子どものうけ答え態度の一つである。

書籍性言語についても、事情はほぼ同じである。「本にかいてあった」ということを切り札に使うだめ押しのわりきりかたである。書物に書いてあることが真か、現前の事実が真か、という立場からも冷静に問われねばならない。

☆

子どもの知識吸収には、いろいろなスジ道がある。権威視されているそれぞれの機制には、その一つひとつに時代を背景とした流動や起伏がある。それにしても最近の『テレビ性言語』の台頭

のはげしさには驚くばかりだ。
実物の時計を使って、文字盤を動いてゆく長短二針のよみとりを勉強していた。
「午後三時、オヤツの時間ですね。よごれた手は病気のもと、水でチャンと洗ってオヤツをいただきましょう。三時半〜四時。お友だちと仲よく表で遊んでいますよ。野球かな、お店ごっこかな。四時半〜五時、そろそろ夕方、あまり遅くまで表で遊んでいてはいけません。いいかげんにサヨナラして帰るんですよ。」
五時半〜六時。
「あツ、テレビだよ。早く帰って〝月光仮面〟を見なくちゃ、終ってしまったらたいへん。」と良一が立上り目をキラキラさせていう。
別の機会に、子どもたちに、「なにかハッとした——ということを思い出してみよう。」といって書かせたら、英一は、たった一つ、
「テレビのマンガをみようとおもって、もう六じすぎたかとおもってはっとした。」と書いている。(午後六時)イコール(テレビ)という結びつきは、良一や英一に限らず、子ども仲間にかなり一般化した意識連合のように見うけられる。六時という時刻が、テレビに直結してとらえられ、意識されているという知識のタイプは、教育上たしかに注目されねばならぬ〝今日的現象〟である。
体操の時間に、〝一本橋渡り〟をやった。五十センチほどの高さにしつらえた丸太ン棒の上を、おちないように平均をとって一端から他端へ渡り歩いてゆくのだ。子どもには、これが気に入りの運動のひとつである。子どもの列の間にわりこんで、先生が渡りはじめた。両手を左右にひらいて、わざと大ゲサな身振りで……。子どもらは声をあげて喜ぶ。「マンモスコング」「マンモスコング」と男の子らが口を合わせてはやし出した。
「なんだい、それ。」と先生がきき返すと、「テレビに出てるんだよ。先生がマンモスコングそっくりだよ。」ときた。
木の葉が色づき、それがヒラヒラと風に乗るようになり、気温が一日ごとに下る。それが皮膚に感じられる季節となった。理科の時間——寒さにむかっていじけないこと、カゼひきがふえてくるが、それを防ぐにはどうしたらいいか、ということから、話は、衣服の着重ね、夜具の重ね合わせなどにおよんだ。弘之は得意そうに立上り、「蚕の糸でキレを作るんだよ。それでフトンを作るんだよ。うすいものでもね、着物を何枚もかさねるとあったかいんだって(先生と同じコトバを同じ調子でくり返して)。」そのように物知りのほどを、ひとくさり披露して、さて、その後に、「ぼくね、テレビで見た。こないだテレビでやってたんだ。」と、テレビの権威で、自分の知見にハクをつけることを忘れない。
発育の悪い精神年令の遅れた健次は、休み時間にちんまりと机に向かい白紙の自由帖をひろげ、気に向くままに色パステルをつ

かみとって、何かをかきこんでいる。のぞいてみた。丸と棒をくっつけあってできた幼稚な人物絵の下に、やっと覚えたひらがなでことばを書きならべているところだった。

「おうとばい・ぴすとる。」そしてその左に並べて「げっこうかめん」つづけて「さたんのつめ」である。テレビが大きな顔で、デンとここにも坐りこんでいる。

子どもらの間で何かが話題に上る。その話題となったことがらについて、「テレビでは○○といっていた。」と中のひとりが思いついて言い出すと、「そうそう、そうだよ。」「ぼくもみた。」「わたしもみた。」と、証人めいた同調者・支持者がいくたりも出てくる。こういうことが、最近めだって多くなった。教室での学習中でも、校庭の遊びの中でも、また路上のとりとめない話しあいの中でも……。

これはテレビが子どもらの知見を均質化しつつある何よりの証拠である。テレビの伝えていることがらが、子どもらの知識に「ワク付け作用」を果している、この現象は注意に値する。

テレビに強い興味と関心が向けられ、テレビが気をそそる話題のひとつとして、子どもらの話し合い社会に登場するという程度ではなく、テレビが欠かすことのできない生活内容として、子どもら自身の生活の一部（それも主要な一部）に組みこまれ、しばしばテレビという『新しい生活の広場』で、物が考えられ、事がとり進められ、話し合われているという事実、しかもそういう傾向が、目を追って強まってきつつあるという目前の事象に、目をみはっておどろくとともに、おどろいてだけいてはすまされぬさし迫ったものを感ずるのだ。いったい私たちは、教育上、どのような対応姿勢をとったらいいのであるか。とにかく、真剣に、テレビとの積極的な協応動作を考えねばならないところだ。それが〝教育テレビ〟の発足を早めさせた底の力にちがいない。

☆

ことしの五月、入学したての一年生相手に五十音別のコトバあつめをした。

「こんどは『わ』のつくことば――さう思いついたらどんどん言ってごらん。」

「わんわんものがたり―わごむ―わりばし―わいわい―わらだいおうごく―ワンダフール・クイズ。」と、とびだしてくる。「わきみず―ワシントン―ワンダンアウツ―わらった―ワンナウト。」とおっかける。

こうした一連の学習をつづけながらも、そこにとりだされるコトバを通して、「テレビに影響されている子ども」の多いことに、いくたびとなくおどろいた。あきらかにテレビから仕込んだと思われるテレビ性言語がヒョイヒョイととびだしてくる。

十二月の声をきいてクリスマスが迫ってきた。そんな一日「サンタクロースのおじいさんへのおねがい」を自由に書かせてみた。「サンタクロースのおじいさん、げっこうかめんってどうい

うじ、おしえて。」早苗が書いた二つの願いの一つがこれだった。

明彦からは「おかねをためるの、どうやればいいのですか。サンタクロース、たのむからおしえて。『月光か』この『か』っていうのはどういうじですか。」と二つの願いが出された。テレビへの心の傾斜が、こんな風に、生活の各場面にヒョイヒョイと顔をつきだすのだ。子どもらの生活にガッチリくいこんだテレビの力のすさまじさを思わずにはおれない。こういう傾向はテレビの普及状況を見るにつけても、深化し広範化すること疑いない。

世の中には知恵のおくれた子どもや学力が劣っているため気づかわれている子どもは多い。テレビが、これらの子どもの「学力の遅れ」をとりもどす働きに使われたり、あるいは、学力の伸びの低調さを修正するために役立てられるとしたら、これはまぎれもなく、子どもらにとって、耳そばだてるに値する福音である。

テレビがおくれた子どもの知的救済に活用されるだけでなく、素質のすぐれた子どもらにも積極的に働きかける建設的側面も、一層強く考えられねばならない。テレビが、〝すぐれた次の世代〟の形成上、欠かし得ないりっぱなカギになる日を、一日も早くと待ち望むわけである。

（明星学園）

☆　☆　☆

＊　＊　＊

日本保育学会

——第十二回大会予告——

一、日　時

第一日　五月二十三日（土）
午前十時—午後四時

第二日　五月二十四日（日）
午前九時—午後四時

一、会　場

東京家政大学
東京都板橋区板橋町六丁目三五六九番地

一、プログラム

(1) 研究発表
(2) シンポジウム（題未定）

一、参加申込

(1) 正会員は当方より御案内いたします。
(2) 準会員は当日受付けます。

なお、御連絡は左記へお願いいたします。

連絡先

東京都板橋区板橋町六丁目三五六九番地
東京家政大学内
日本保育学会第十二回大会準備委員会
（電話(96)五二二六～九）
日本保育学会